

うたらは。

短歌×写真のフリーペーパー「うたらは」
2026.7 vol.42

TAKE FREE

コンビニ

今回のテーマ



短歌とは

5・7・5・7・7の5句31音のリズムで詠まれる短い抒情詩。
俳句で使われる「季語」は不要。

古くは奈良時代から身分の貴賤を問わず親しまれ、
現代でも日々の想いを綴る詩形として幅広い層に詠まれています。

一方で、その長い歴史を国語の授業で習うこともあり、
短歌とは難しいものである、と思っている人もしばしば。
このフリーペーパーは「短歌をよく知らない人」に
現代短歌の面白さに触れていただくために作ったもの。
軽い気持ちで、ぜひページをめくってみてください。

作品テーマ

コンビニ



便利という名の
その場所に
温もりがある
寂しさがある

その一言に
背中を押されて
かがやく朝が
あったりもする

おばちゃんのいつてらっしゃいをチャージする

月曜の朝のセブンイレブン

進捗をからかいながら

コンビニでひらくサクレのレモンごと夏



その後どうよと
ふざけあう
時間すべてに
夏のまぶしさ

手にするだけで
日常になる
不思議な袋
かもしれないね

コンビニの袋を下げて旅先の

街のピースに擬態している

短歌：くらたか湖春

空気も音も
まるで違った
ドアが隔てる
ふたつの世界

山あいのいとなみの声おしよせる、

コンビニの自動ドアが閉じれば

短歌：三木絵糸

番号を告げる0.2秒前

ゲンさんの手がメビウスに触れる

街に馴染むって
こういうことか
なんて思ってた
空を眺める

短歌：森岡さや

家族より好きな具を知る店員が

黙って添えるサラダのお箸

コーンサラダ
Corn Salad

あ、またこれだ
とか思われて
いるかもしれない
けど悪くない

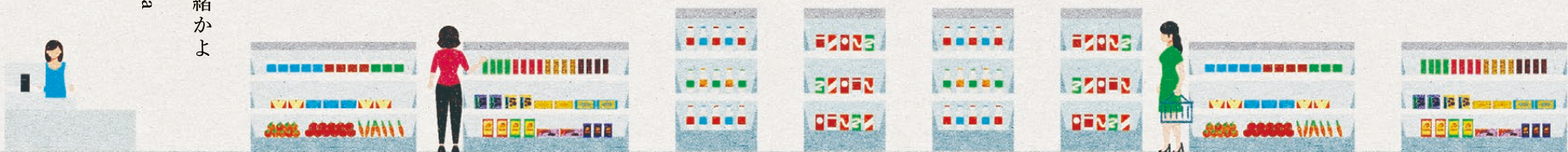
佳作集



コンビニ①

方舟となつて浮かんだコンビニに乘れずひとりの夜道を歩く／月見だいふく
コンビニの廃棄のパンで春のパン祭りの皿を集める春だ／稲葉ゆい
午前2時5分のいらっしやいませで世界がひとつ救われている／竹上言ふと
人生は迷つてばかりコンビニは行き止まりのないやさしい迷路／渡邊泰明
ユニフォーム私に似合いそうだからなんて理由で選んだバイト／安達萌葉
蛍光灯切れかけているコンビニの棚から救う鮭のおにぎり／梶原一人
配列も配置も同じなんだけど方言だけが違うコンビニ／てと
コンビニで愛を買うのか真夜中の明かりに寄つて鳴いている蝉／雪風みなと
あつたかいほうじ茶ラテを抱え込み帰りたくない寒風の夜半／白里りこ

レシートは今日生きていた証だと星を見あげてコンビニへ向く／ノウセイ＋
嬉しいや楽しいがあるコンビニに履歴書セット買いに出かける／大橋奥文
レジ袋いりませんって言うときの小さな嘘に似ている孤独／箭田儀一
コンビニの消えたエンスのように僕まだ生きてもいいのでしょいか／仲川曉実
向けられた銃口を背で感じつつ ホットスナックゆっくり選ぶ／赤埜よなか
過ぎ去った希望みたいだコピー機の細い光が漏れて横切る／友常 甘酢
僕がまだビニール傘を買わないでいるから晴れにしない神様／小緑悠
ポケットにお祈りメールを突っ込んでツナマヨおにぎりを買いに行く／秋海
雨を見ているコンビニのイトインコーナー 傘を買おうと言わずにふたり／宮緒かよ
買うものは特にあれってわけじゃなく今日という日を選び越えたくて／Nociluca
うまく開けられなかったおにぎりの包みに残った海苔がきみだよ／もみじ寝子



● REC

1H 30M 80%

ISO 200 / 1080p / 30fps

故郷の終わりにあったコンビニの

監視カメラに手を振って去る

きっといつかは
帰ってくるけど
ありがとうって
思ったんだよ

00:28:01:05

短歌：稲野

肉まんの湯気にめがねをくもらせて

世界のほうからやさしくぼける

世界とあなたが
白く滲んで
大笑いした
そんな日常

私も一緒に
ここまで来たと
故郷の空へ
思いを馳せる

関東にセコマがあつて誇らしい

北海道へつづくあをぞら

良いことひとつに
悪いことひとつ
そんな感じで
毎日がある

50円引きのシールがあるせいで

いつものように海苔が巻けない

残業のあとは必ずコンビニに

立ち寄る父をコンビニで待つ

我が家でも
ないというのに
おかえりと言う
場所だったんだ



コンビニ②

コンビニのシュークリームを買うあいだ宇宙はひとり膨らんでいる／山賀俊一

どの人も台詞を持たぬ役のごとコンビニを出る夕間暮れなら／杜野詩季

常夜灯だったローソン1Kのアパートよりも我が家みたいで／立田溪

帰り道10円引きの肉まんは胸に抱かれ子猫になった／栗生藤代

コンビニが八時に閉まる旅先でそれがたっし街に思えた／関根裕治

番号で管理されてる俺がいま番号を呼んで煙草を買った／泰源

「あのひとと寄ったことあるファミマ」って密かに名付け呼んでるファミマ／笛の音

生きていく用の弁当買いに行く日々でいちばん明るいところ／倉田紬

気だるいが何とかコンビニまで行けてチキンを買えるのがバロメーター／衣未（みみ）

この店のコンビニエンスな営みは誰から奪ったものなのだろう／東雲 航

大切にあなたためすぎて私たち賞味期限をのがしてしまう／玖嶋さくら

コンビニも潰れるんだねまたひとつ灯りと記憶おぼろげになる／ヒロミ

ちょっとだけ気分が良くてコンビニを一つ飛ばしてコンビニへ行く／吉田敦史

先発はたまごに代わりちくわぶでコンビニおでんのスタメンを組む／星野珠青

忠実な老臣のような顔をしてローソンのロールケーキを出せり／みぎひと

コンビニのセルフレジにも別れ際最低限の挨拶をする／今井久里

病院のコンビニは少し高潔で普段はスーツを着てると思う／鮎田わさび

悲しみを流す蛇口が壊れて深夜のセブンまで歩いてく／殿内佳丸

コンビニでいいやみたいな諦めでよくいいやと選んで欲しい／遊鳥泰隆

歓迎をされた気になるためだけに入ってしまうファミリーマート／マスダ本線



反省を見せれば罰が軽くなるポイントカードのような世の中

(ボルケ・ポリンヌ)

主体の世の中に対する違和感が表出している一首。公判中に事実を認めたうえで反省の弁を述べるのは有罪は免れない場合に罪を軽くするための戦略とも言えます。買ひ物をしてポイントが貯まれば割引があるように反省の弁を重ねたら情状酌量が与えられる。そんな気軽に刑罰を軽くしていいんだったつてという疑問が、身近で気軽な例えによって表現されているところに作者のセンスが光ります。

太陽に背中を向けて生きている人がいちばん先に見る虹

(たろりずむ)

「太陽に背を向けて生きている」ことは一読すると目標に向かって努力せず言い訳などしながら生きる天邪鬼のような人が連想されます。でもこの作品はそんな生き方でもたまにはいいことがあるはず、と教えてくれる希望の歌。どんな生き方になってきつと救いはあって、その救いとお会えるかどうかが人生を左右するんだらうなと感じた作品でした。

似顔絵にすれば省略されるほど些細なことがちゃんと悲しい

(吉村のぞみ)

主体が伝えたいのは下の句の「些細なことがちゃんと悲しい」という事実。その些細さの例えとして上の句の「似顔絵にすれば省略されるほど」があるという構造。上の句の比喩が実体験に基づくものかどうかは分かりませんが、具体がなくとも下の句は広く読者の共感を得られるものでしょう。些細だと放置してしまつて後から大きな悲しみに変わらないうように生きたいですね。

我々はもう充分に幸せだ流れる桃は誰かが取るさ

(高橋あつむ)

誰もが知っている桃太郎のお話を下敷きにした作品。おじいさんの柴刈りの間に川で洗濯をするおばあさん。その慎ましくも充実した生活に突如現れる不穏分子の「桃」。拾わないことも十分に考えられる選択肢です。もしかすると私たちのよく知る桃太郎のお話も、上流で桃を拾わなかった老夫婦がいたから生まれたのかも知れない。そう考えると桃太郎がどんな意味深になっていきます。

読む。

「月刊うたらば」より

文・田中ましろ



軽くないダウンジャケット
何羽分羽根が詰まっている
かと思うと

(ふうらい牡丹)

気になったので調べました。一般的なダウンジャケットには10羽〜30羽分の水鳥の羽が使われているそうです。全然軽くないですね。羽毛布団だと100羽〜150羽とのこと。あくまでも食用用の副産物としての羽毛を活用するようですが、身近なものを気付きのある視点で捉えなおすことで新たな発見に変えるお手本のような作品でした。お見事。

後ろ前逆に着ていた半袖とそれでも成立していた一日

(さくらいたかよし)

着用したTシャツの見た目や着用感などに不自然さがなく、朝からずっと逆のままだったことに帰宅後に気づく。この作品のポイントはその状況を恥ずかしいつか失敗とかの感情でまとめるのではなく、「それでも成立していた一日」とした点。後ろ前逆に着たくらいじゃ日常は壊れない。小さなことに動かない、生きるヒントが隠れた作品ですね。

めでたしで終わる絵本でめでたしにならない鬼のために泣く子ら

(てと)

子供たちに人としての正しい行いを学んでもらうため、ほとんどのおとぎ話は勧善懲悪。しかし今は多様性の時代。「鬼、やつつけられて可哀そう」と感じる子がいってもその気持ちは尊重されることでしょう。作中に登場する子供たちはむしろ感受性が豊かで素晴らしいなと思えます。そんな子供たちの気持ちも大事にする教育の現場なら素晴らしいですね。

どこへゆく時刻だろうか質流れしてきた時計のアラームが鳴る

(須磨堂)

時間の流れを可視化する道具としての時計。その時計自身が「質流れ」と「アラーム」によって過去のある時点と現在を結びつける道具になっている、という点に惹かれました。「アラーム」によってその時計の過去の持ち主の暮らしが浮かび上がる。その「アラーム」をきっかけに知らない誰かの過去へ思いを馳せられる主体の心の在り方も素敵です。

ランドセルおろせば肩は軽くなる おばけに持ちあげられるみたいに

(井上 眞帆)

下の句の比喩が素晴らしい一首。ランドセルなので作中主体は小学生でしょう。一日分の教科書を詰め込んでとても重たいランドセルをおろしただけの状況。そのときの肩の軽さが「おばけに持ちあげられるみたい」なんです。おばけに持ちあげられたことなんて絶対にないのに妙に確信のある直感。そこに小学生らしさがあることで主体の気持がまっすぐに伝わる力強い作品に仕上がっています。

咲いたかなマンション完成予想図に描かれた桜(※イメージです)は

(大葉れい)

マンション完成予想図は緑豊かな周辺環境や満開の桜が描かれていることが多い気がします。偶然見かけた完成予想図に添えてあった「※イメージです」。どこまでが「イメージ」で許されるかは賛否が分かれそうですね。購入したわけではない主体には桜が咲いても咲かなくても困らない、その心の距離感が初句の「咲いたかな」の軽さに込められているところが好きです。

短歌募集中

「月刊うたらば」では、いつでも作品を募集しています。毎月変わる投稿テーマにて、短歌作品をぜひお寄せください。今月のテーマは「募集要項などの詳細は「うたらば」公式サイトをチェック」



母の味とふ味があり

肉豆腐ひとつ買いアパートに着く

忘れないために
ときどき振り返る
遠く離れた
ふるさとのこと

うたらば vol.42【コンビニ】 2026年7月12日発行

○企画・撮影・編集 / 田中ましろ @mashiro_tanka

○モデル / TOKO @iamtookoo

○短歌 / 投稿者の皆様

X @utalover 地球 https://www.utalover.com/

編集後記

今号も最後までご覧いただきありがとうございました！今回のテーマは「コンビニ」。誰もが行ったことのある日常の一部で、思い入れも色々あるかなと思ってのテーマ設定でしたが、ひとりひとりのコンビニ観が垣間見える面白い一冊になったと思っています。

毎年、今回のような梅雨時期の制作は雨との戦いなのですが、今号はなんとか雨を回避しつつ仕上げることができました。モデルを務めてくれたTOKOさんの晴れ女っぷりにも感謝を。

次号のテーマは「相棒」。恋愛も友情もペットとの絆もすべて包含できるテーマのはず。みなさまの作品を拝読できるのを楽しみにしています！

企画・写真・詩・デザイン

田中ましろ

短歌は
もっと
自由になれる

